

「いまひとたびの」

登場人物

修行者・護法童子

宇治の橋姫 宇治

橋姫・絹 橋姫

地藏／船頭

火車／ナレーション

〈1〉

橋姫、橋の上に立ち、舟の上の船頭へ手を振る

橋姫…「早く帰ってきてね」

船頭、舟で川を下りながら片手で手を振りつつ

船頭…「我が名呼ぶ声の溶け出で（いで）流ぬれば帰り来ぬ（きぬ）べし我の橋姫」

橋姫…「分かった！ あなたの名前たくさん呼ぶわ。川の水に私の声が溶けてあなたのところに届くまで！ だから、早く帰ってきて！」

二人とも舞台からいなくなる

ナレ…橋姫、について知っているかい？橋と橋の結界を守る女神のことだ。元々は橋の袂に住む愛しい人という意味だったが、平安の世の中頃からは嫉妬深い鬼女となった。特にもとは貴族の娘だったが、恋人に裏切られ、呪術に邁進した末に生きながら鬼となり、男や男を奪った女とその血縁、果ては罪のなきものまで大勢を襲った宇治の橋姫については知っているかもしれない。嫉妬深い鬼女だが、良くも悪くも、橋姫とは惚れた男に一途なんだよ。だが、橋がなくなってしまうえば、橋姫が成り果てるのは……鬼。

〈2〉

橋姫、橋の袂に立っている。

橋姫…「切実な感じ」もし、旅のお方ですか」

童子…「はい、そうです。お嬢さん、何か……」

橋姫…「お願いです。これを、これをあの人に渡してください」

童子、嫌がりはいしないが橋姫の手を上から押さえて離すよう促しながら。

童子…「失礼、お嬢さん。あの人とはいったいどなたのことですか？」

橋姫…「あの人よ！ 私の旦那様になるはずの方。あの日、川を下って行ったきり帰ってこないの！ きつと迷っているんだわ」

童子…「あなたの言う方のお名前とあなたのお名前を教えてくださいますか。その方の特徴と、どこに行けばお会いできそうか、も。私は何も知らないのです、教えてくださらなければ分かりません」

橋姫…「ごめんなさい。そうよね。あなたはここいらの方じゃないもの。私のこともあの人のことも知らないわよね」

橋姫…「どこから話せばいいかしら。人が通りかかるのはずいぶん久しぶりで……誰かが来るのをずっと待っていたから、必死になってしまったの」

童子…「長くなってもかまいません。お聞きいたしましょう」

橋姫…「あの人ね、秋と冬の間、山で切り出した木をずっと下流の街まで川で運びに行くの。（俯いて視線を伏せて）川を下るときは必ずここを通るんだけど……」

童子…「しばらくその方とはお会いしていないのですか」

橋姫、俯いたまま小さな声で。

橋姫…「ええ。しばらくどころじゃないわ。もう何年も。（川を見て）私は毎日ここで待っているんだけど……（童子の方へ顔を向けつつ俯いて呟くように）あとどれくらい待てばいいのかしら」

橋姫…「あの人はきつと迷っているだけなんです。川も土地も変わってしまったから、ここまで辿りつけないだけ。（文を差し出しながら）どうか、あの人に会って、私はここで待ってるって、（念を押すように）どうかそう伝えてください」

童子…「文を受け取り懐に入れながら）……ええ、わかりました。（着物の上から手紙を押さえて）その方にお会いできましたならば、必ず」

童子、橋を渡ってそのまま舞台から消える。橋姫はその背中を童子が消えるまで見続ける。

童子が消えたら、橋姫も舞台から消える。

〈3〉

ナレ…山伏について知っているかい？ 山野を修行の場とし、神通力（じんずうりき）を得、悟りを開くことを目指す者たちのことだ。修行して得た力を人のために使って救いを齎すことも山伏の役割だね。彼らは戦いの神である毘沙門天に加護を願った。そして、毘沙門天の従者であり護法たる仏法を守る護法童子も、自身が救いを齎す存在でありつつ山伏たちにも加護を与えたとか……。

童子、俯き加減で歩きながら登場。

宇治…「あの子、橋姫だわ」

宇治…「どのくらいあそこにいたのかしら。わからないけれど、長いこと一人きりでいたようね」

童子…「宇治殿。見ていらしたのですか」

童子…「あの方で千人目です。私が千人救う前にあなたがご自分のお名前を思い出す約束……お忘れではないでしょうか」

宇治…「……」

童子…「あの方を救って差し上げたいが、どうやらご自身の名も、お相手の名も忘れてしまったようです。彼の人の痕跡を辿るのも難しいでしょう。宇治殿には何か妙案はございませんか」

宇治…「斬ればいいじゃない。あなたのその剣で。その剣は、どんな妖魔も断つことが出来るんでしょう？」

童子…「斬る？ いいえ、そんなことは……私にはできません。ただ彼の人を想う心を斬るなんて、あまりにも……」

宇治…「拗ねた感じで）そんなの知らないわ。橋姫だもの。執着が過ぎて己の名すら忘れてしまった身を救う術なんて」

沈黙。童子、剣の鞘を握りしめたまま、歩き続ける。（陰悪ムードな感じで）

童子、一度舞台から消えてもう一度歩きながら現れる。刀の鞘からは手を放してい

る。

童子…「宇治殿。先ほどの方についてお話してもよろしいでしょうか」

宇治…「……何かしら」

童子…「考えていたのですが、あの辺りは普通の人間が通る場所ではありません。あれほど荒廃しているのは何か事情があるのでしょうか。それに、あの方の格好をご覧になりましたか」

宇治…「ええ。随分と上等な紅を差して、着物だって古いものだけど良いものだったわ。見たところ、唐木綿だったもの。随分愛されていたのね」

童子…「唐木綿は外つ国の高価なものです。あんなものを着せられるほどこの辺りが栄えていたとしたら、今はなぜこれほど廃れているのでしょうか」

地藏菩薩の前につく

宇治…「私に聞かれても困るわ。木が取れなくなっただけでもなさそうだし、知らないわよ。文の中身を読んだら何か分かるかも」

童子…「いいえ、そのような無礼なことは出来ません。それに、中身を見たところで自分や相手の名前を忘れた方が手掛かりになることを書かれているなんて思えませんし」

宇治…「……はあ（ため息）」

童子、辺りを見回して、さっと体勢を低くして油断なくあたりを見回し、鞘に手をかけて警戒の姿勢をとる。

童子…「何か来ます」

ここで一気に夜になる。

火車「見つけた。方々探したんだぞ」

火車、反対側から登場。

童子、警戒を解く。

童子…「火車殿、しばらくお見えになりませんでしたね」

火車、ちよつと嫌味っぽい感じで。

火車「アタシだって忙しいのさ。なにしろ、罪深いものを逃がさず地獄へ送り届けるのがアタシの仕事なんですね。忙しくてお前のように悠長にしている時間なんてないよ」

火車、目を細めて顎を引き、童子を観察するように。

火車…「もうすぐ千人目だろう？ そろそろアタシの出番だからね。取り逃がしちゃあ、アタシが閻魔大王にお叱りを受ける羽目になる。たまったもんじゃないね」

火車、童子に近づいて胸に手を当てる

火車…「それで、おいアンタ。ぬくぬくとこいつの体に居座って、自分の名前は思い出したのかい？」

宇治…「……」

火車、ちよつと不機嫌そうな感じで童子から手を放す。

火車…「フン、まあ、もうすぐあんたもアタシがペロリだ」

童子「火車殿。まだ時間があります」

火車…「アタシは別にお前さんに意地悪がしたいわけじゃない。むしろお前さんが気の毒だ。だがお前さんがそんなに救おうとしたところで、結局は無駄に終わるだろうよ。もうほとんどそうじゃないか」

童子、何か言いかけて唇を噛み、意気消沈した感じに。

火車…「お前さん、地蔵菩薩に聞くことがあるんだろう。あたしは邪魔しないから、さつさと聞いちまいな」

火車、舞台から消える。

童子、地蔵に近づいて片膝を突き、俯いて目を閉じて両手を合わせ、だまつて祈る。

地蔵…「穏やかな優しい感じで」苦難の道を歩んでいるというのはお前か。さぞや辛い道であろう。私がお前の力になれることがあると良いのだが」

童子…「地蔵菩薩様。あなたはこの川の上流におられる橋姫殿について何かご存じでしょうか」

地蔵…「橋姫？ ああ、聞いたことがあるよ。なんでも恋しい人が帰ってくるのを橋の上で一人待っているのだと。あの子は私が救うことは出来なかったが、お前が救ってくれるのか」

童子…「私が救えると……良いのですが……」

地蔵…「これは石仏である私の記憶だが、あの辺りがなぜ荒廃してしまったか、お前は知っているか」

童子…「いいえ、存じ上げません。（身を乗り出して切実そうに）教えていただけますか」

地蔵…「どこから語れば良いのやら……」

地蔵…「二百年も前の話だよ。山の神と川の神が諍いを起こして、川の神は土地神ごと山神に襲い掛かってね。あのとときに村の男たちも大水に飲み込まれてしまったのだらう。お前も知ったの通り、土地神のいない土地は、人の住むことのできぬ土地。僅かに残った者たちも住み続けようとしたようだが、徒労に終わり、あの橋姫だけが残されたのだらう」

童子…「ならば橋姫殿の恋しい方は、その時の大水に飲み込まれてしまったのでしょうか」

地蔵…「さて。私はその橋姫の恋しい者が誰かは知らない。運よく生き延びることができて村に戻ることはかなわなかったかもしれないな」

地蔵…「だが、こう川の水が干上がったのは、あの川底に沈んだ村も姿を現すかもしれない。そこに沈んでいたものならば、お前にその橋姫についてもその想い人についても語ってくれよう」

童子…「……（痛まし気に）そうだと良いのですが、あなた様のお話によれば二百年も昔に沈んでいることになりました。そんなところにいったい何が残っているのか……恐ろしいような気も致します」

地蔵…「この川がこのように干上がるのは初めてのこと。何か理由があるのだらう。早星が輝こうとも、この川の神はこれほどになっただけではないのだ。その橋姫と何か関係があるのかも何が起るのかも分からぬが、油断をするでないぞ」

童子、頷く。

地藏…「(含み笑い) ほっほっほ」

童子、もう一度地藏菩薩を拜んで立ち上がる。川の方を向いて真剣な表情で。

童子…「宇治殿」

宇治…「何かしら(ちょっと妖艶な感じで)」

火車、のっそりとした感じで出てくる。

童子…「ご存じの通り、橋姫殿はあの橋が完全に崩れてしまえばただの鬼です。川の水が流れていれば、それに乗って下流まで害を及ぼすことでしょう。もしや川の神はそれを察して水の量を減らしているのではないのでしょうか。(はっとしたように) だとすると、もはや時間はないのかもしれないかもしれません」

童子…「火車殿、申し訳ございませんが、急ぎ我々を連れてあの山まで飛んで行ってはいただけませんか」

火車、ちよつと沈黙。

童子…「火車殿!」

火車、出てくる。

火車…「ああもう、聞こえているよ、私はお前の乗り物じゃないんだが、ちつとばっかり乱暴でも文句は言うなよ」

火車…「乗れ」

暗転 以下声だけ

火車…「今まであんたほど無遠慮にあたしの毛を引っ張った奴はいないぞ」

童子…「火車殿、あの山の麓です。行けば分かります、急いでお願いします!」

どしん、どしんみたいな効果音があればいい。

童子…「あれは…:…:蛭? 蛭は人の魂の化身です。川が枯れているのになぜこれほど…:」

〈4〉

荒れ果てた感じ。周りに石とか木とか転がってる。地藏菩薩も転がっている。端の方に蛭を表現出来ないかな。枯れた川の川底に降り立つ。

どしんどしんの効果音が止まる。

童子、端から現れて倒れている地藏菩薩に駆け寄って起こす。

童子…「地藏菩薩様!」

童子、地藏菩薩の前に膝を突いて揺さぶる

童子…「地藏菩薩様、私の声が聞こえていらっしやればどうかお応えください!」

地藏…「随分と長い年月が過ぎたようだね」

童子、ちよつと落ち着きを取り戻して、居住まいを正す。

童子…「はい。おそらく二百年ほど過ぎたとお聞きしております」

地蔵…「二百年……そうか。人の世では長き時だ。長らく川の底で皆を見守っていたが、ようやく皆を浄土に導ける」

地蔵、安心したように嘆息を漏らす。

地蔵…「それで、お前は私に何か用があるのであろうな。そのような顔をしている」

童子…「はい、地蔵菩薩様。私は、橋姫殿を救うためにやって参りました」

地蔵…「橋姫？ それはこの上に住むあの子のことか？」

童子…「はい、存じておいでなのです」

地蔵…「もちろんだ。私はあの子を救うことも身代わりになることもできなかった。あの子が神の嫁になろうとも、私はもう川の底……どうすることもできなかった。私はあの子をあの橋から引きはがすことは出来ないが、その剣を持つお前なら悪しき縁（えにし）も断つことが出来よう」

童子…「詳しくお話をお聞かせ願えますか」

地蔵…「そうだな。お前はあの子についてどれほど知っている？」

童子…「村が沈んだのは川の神と山の神との間の諍いが原因だと聞いております。川の神が大水を起こし、その大水が原因で橋姫殿の恋しいお方も行方知れずとなられ、戻っては来られなかったのでしょうか。土地神もいなくなれたと聞いております。橋姫殿は……」

童子、言葉を探すように視線を彷徨わせる。（嘘をつく）

童子…「……橋姫殿もその大水で亡くなられたのでしょうか。残った村人が架けた橋に、橋姫殿が乗り移ったのかと……」

地蔵…「たしなめるように」嘘は良くないぞ。死んだ者は神の妻にはなれないとお前も知っているだろう。（厳しい感じで）あの大水で死んだのなら、あの子は私が守っていた。他の者と同じように」

童子…「……」

地蔵…「あの子はもう限界なのだろう。川の神が川を涸らしたのは、あの子が川に沿って人里へ降りて災厄を齎すことがないようにだろうね。川の神とて、情はあるのだよ」

童子、立ち上がる

童子「私はこれから橋姫殿とお話をするつもりです。地蔵菩薩様、一緒にいらっしゃいますか」

地蔵…「もちろんだ」

☆地蔵が自力で動いている感じにしたいけど、できるかな？地蔵は足が亀みたいに遅くて、童子は必死だから地蔵が追い付いていないことに気が付かない）

出来なかつたら童子が運ぶ。もしくは一回暗転して橋姫のところまで童子と地蔵がいるところからまた始める。

橋姫、橋から降りてきて童子に近寄る。火車、少し離れたところで童子と橋姫を警戒した様子で見守る。

橋姫…「旅のお方？ あの人に手紙は届けていただけましたか」

童子…「ちょっといい淀んで」……いいえ。方々探しましたが、お会いすることは
ありませんでした」

童子、懐からちよつと寄れた文を出して橋姫に差し出す。

童子…「お返しします」

橋姫、それを受け取らずに目を剥きだしてさらに同時に詰め寄る。

橋姫…「裏返った声、童子が大罪を犯したかのように」会えなかったの？ あの人
に？」

童子、すまなさそうな様子になるが、一転、宇治に乗っ取られて馬鹿にしたような
表情で

宇治…「甲高く、馬鹿にして、嬉しそうに」会えるわけじゃないでしょう、二百年も前の
人よ。生きていたら、それはお前と同じ人ならざるモノよ。あなたの言う人が
ただの人ならとうの昔に死んでいる。あなたは無駄にここに二百年もいたわ
け」

橋姫、呆然として沈黙

橋姫…「……死んだ？ あの人が？ そんなはずない！ あの人には帰ってくる。だっ
て、だって！」

宇治…「帰ってくる？ そんなわけない。お前は、その人の名を忘れてしまったのだろ
う？」

宇治…「我が名呼ぶ声の溶け出で流れれば帰り来ぬべし我の橋姫、だろう？ お前の文
の裏に書いてあったよ。（童子、手に持った文を持ち上げて）お前の男の歌だろ
う。お前は橋姫、この川の神の妻だ」

橋姫…「意味が分からないという様子で」妻？ あたしが？ 川の神の？ 橋姫？
私、私はあの人になるのよ、次に帰ってきたときに祝言を上げるの！」

宇治…「でも帰ってこなかった。そして残されたお前は、ここが人の住めるところでな
いと知らずに残った村人にこの橋を架けるために川の神の嫁になった」

橋姫…「嫁？ あたし、あたしそんなじゃないわ！ 違う！ 違う！」

宇治…「あなたはどおしてそんなにきれいな服を着ているの？ 貴族でもない身で、そ
んな上等な紅も差して」

橋姫…「これ、これは！ これは、あの人を待って……あの人と祝言を上げるための……
…」

宇治…「じゃあ、その人の名前を行ってごらんさいよ」

橋姫、口を開いたが船頭の名前が出ず、顔を強張らせる。わなわなと唇を震わせ
て、震える息に縋るように立つが、ひとつしゃくりあげて膝から崩れ落ちる。呆然と
空を見つめて。（泣けるといいけど、ただの希望）

橋姫、ちよつと泣きそうな呼吸をして、それから顔を覆う。

橋姫…「悲鳴のように」あたし、あたしが悪いんだわ！ あの人の名前を忘れてしま
ったから」

宇治…「悪い？ いいえ、悪いのは川の神でしょう？ お前の恋しい人も、お前も、村
人も全員殺したのだから」

橋姫…「宇治の言葉は聞いていない」一目でいいの！ あの人に会いたい！ 私はこ

の橋が崩れたら死んでしまう！ あの人を残していつてしまう！ 一目でいいの！ 一目でいいからあの人に……（消えるように）」

宇治…「（橋姫の顔を覗きこみように）そいつに会いたいだけ？ わたくしだったら、そいつとわたくしを殺した神も人も全員喰ってやる！ その蛍でもなんでも喰って、全員崇って喰い殺してやる」

橋姫、顔から手を放して童子を見上げて。

橋姫…「喰う？ 斬る？ あたし、そんなこと出来るの？」

宇治…「出来るわよ。橋姫は鬼女なんだから」

童子、二三步よろめくように体を折り曲げて後ずさる。それから、（体を取り戻して）凛々しい必死な感じで

童子…「おやめください、宇治殿！ 人の魂を喰らえば厳しい裁きが待っている！ まして神を喰らおうとすれば、いったいどんな……」

童子、両手を振り回して暴れるように。

宇治…「うるさい、うるさい！ お前、こいつが誰か知っているかい？ こいつは護法童子だ！ 毘沙門天の手先で、鬼も妖もなんでも斬って全員消してしまいうんだ。お前はこいつに目をつけられた、殺さなかったら殺されるよ！」

橋姫…「殺される？ あたし、殺されるような悪いことしてない！」

宇治…「そんなこと関係ない。こいつが、お前が仏法を脅かすと思ったら殺されるんだ」

橋姫…「あたし死にたくない！ 蛍、蛍を食べればいいのね！ 蛍を食べて、お前を殺せばいいのね！」

地蔵はようやく追いつく。

橋姫、地蔵に気が付かず走り去る。

地蔵…「待ちなさい！」

地蔵、橋姫を追いかけてまた消える。（黒子さん？みたいなのができるといいけど）

童子…「お待ちください橋姫殿！」

童子、橋姫を追いかけようとして、立ち竦んで、宇治が体から抜け出そうとしだして苦しむ。

胸のあたりを押さえて必死に耐えようとするけど自分の体から抜け出そうとするように腕や胸を掻きむしり、えずくように体を折り曲げて膝を突く。

橋姫、その後ろから抜け出すように現れ、ふらふらな童子の上に圧し掛かる。

童子…「宇治殿、おやめください！ 私、私は毘沙門天様に……」

宇治…「うるさい、うるさい！ あいつが救われれば千人目。私は自分の名前を思い出してないの！ わたくしは地獄に落ちてしまう。あなたはわたくしを救うと言った！ あいつが救われなければ、まだ九百九十九人、わたくしに時間が残らないの！」

火車、今にも宇治に襲い掛かろうとした様子で爪を研ぐが、童子に視線で押さえつけられる。

童子、もがいて宇治の拘束から抜け出す。

宇治、橋姫の消えていった下流側に立ちふさがる。

童子、立ち上がって宇治と睨み合って

橋姫…「宇治殿、そこをお退きください。橋姫殿が人の魂を喰らえばあの方は地獄に堕ちてしまいます」

橋姫…「じゃあ、わたくしの道連れにするわ！ それとも、あなたはその破魔の剣とやらでわたくしを斬るの？」

童子、剣に手をかける。

童子…「これで斬れば、斬られたものの魂は未来永劫消え失せます。そう簡単に抜くものではありません」

二人は睨み合う。

童子…「宇治殿、あなたは自分の名を忘れるほど怒りや執着に囚われて、数多の人を殺しました。人を殺せば必ず地獄へ堕ちます。けれど私はあなたを救うとお約束しました。火車殿は、私が千の魂を救うまでの間にあなたが自分の名前を思い出し、人の心を取り戻したらあなたを地獄には連れて行かないとお約束してくれました。宇治殿、私は、あなたがご自分の名を思い出すのにこれほど時間がかかるとは思わなかったのです。けれど、あなたが今までの行いを悔い改めれば閻魔大王様は必ず御慈悲をくださいます。私を遣わした毘沙門天様も……」

毘沙門天、の言葉に宇治は反応。

橋姫…「うるさい！ あなたは結局毘沙門天が大事なのね！ わたくしのことなんて考えてくれない！ あなたが、あなたがわたくしを救うって言うてくれたただ一人の人のために！ 慈悲なんでもらったって私はどうせ地獄行きだわ！ あいつを喰って、わたくしが強くなったら！」

橋姫…「あなたはわたくしのことを見てくれる？」

護法童子、たじろぐ。凜々しさが消え失せ、辿りつくべき場所を見失ったような感じで。

童子…「混乱して消え入りそうに」宇治殿、私には意味が分かりかねます……」

火車…「アハハハッ！」

火車、大笑いしながらのっさりした感じで橋姫を見ながら童子に近づく。

火車…「面白そうに」意味が分かりかねるだっけ？ お前も罪深い男だねえ。ああそうか、今はお前男か。護法童子じゃなくなっただから。此奴を救うって毘沙門天に背きあたしから此奴を連れて行って、何年が過ぎた？ その間、お前は此奴を胸に抱えて守っていたんだろ？ 此奴がお前に恋心を抱いて何がおかしい？」

童子、二人から逃げるように二三歩後ずさる。

童子…「……ちよつと、ちよつと待ってください。まず、まずしなければならないのは橋姫殿が螢を喰らうのを阻止することです」

火車…「意地悪く」じゃあアンタはアイツを救ってコイツを地獄に堕とすんだな」

童子…「困ったように」……私は、宇治殿を地獄に堕としたいなんて思っておりません。けれど、私は橋姫殿が罪を犯すことを止めなければなりません。それが、宇治殿を地獄へ導くことであっても」

宇治、戦意を喪失したように沈黙してうつむく。
童子、そのわきを駆け抜け、舞台から消える。
宇治、火車も舞台から消える。

〈5〉

橋姫が正気を失った様子で蛍に襲い掛かり、地蔵がその背中を引っ張るようにしてやめさせようとしている。

童子、地蔵と蛍を食べようとする橋姫を抑える

童子、前に回って橋姫の肩を押さえながら

童子「橋姫殿！　どうかお聞きください！　その蛍はあなたの良く知る方々の魂の化身です！　あなたの親兄弟の魂でございましょう、どうかおやめください！」

地蔵「やめなさい！　おきぬ！　正気に戻りなさい！」

橋姫、正気付いたような顔になる

橋姫「「おきぬ？　おきぬ……あたしの名前……ああ、そうだった、そうだったわ」

橋姫、蛍を捕まえるのをやめ、消沈した様子になる。

地蔵「「おきぬ、正気づいたか」

橋姫、振り返って膝を突き、泣きそうな感じで地蔵に縋りつく

橋姫「「お地蔵様、あたし……あの人は、もう帰ってこないのね……」

童子「「おきぬ殿。帰ってこないのなら会いに行けばよろしいのです」

橋姫、顔だけ童子の方へ振り向く。

橋姫「「会いに行く？　あの世へ？　どうやって」

童子、蛍の方へ手を差し出しながら。

童子「「この蛍たちは、あなたの村の方々です。あの方々について行けば必ずあちらに行けましょう。そうでなければ地蔵菩薩様がお導きくださいましょう。女人の方が三途の川を渡るとき、必ず恋しいお方が迎えに来てくださいます。その方に負われて川を渡るのです。あなたの恋しいお方が、きっとお待ちでいらっシャいますよ」

橋姫「「でも……私はこの川の神様の嫁になったの。あの人のお嫁さんにはなれないわ」

童子「「いいえ、私があなたと川の神との間に結ばれた縁を切って差し上げましょう」

橋姫、膝を突いたまま体ごと童子の方を向く。

童子、剣を抜く。

童子、ほほ笑んで剣を引き抜く。橋姫の胸元の前で探るように左手を動かすと、一人には見えぬ赤い糸を見つけ出す。

童子「「おきぬ殿、この縁切ってもよろしいですね」

橋姫、頷く。

童子、破魔の剣を振り下ろし、糸を切る。切られた縁の糸は切口から溶けるようにして消えてゆく。

童子…「童子古き縁は切られました。新しき縁をどう結ぶかはあなた次第です。良き縁に巡り合われることをお祈りします」

橋姫、やわらかに微笑んで、呼ばれたように螢へ歩み寄る。その体が橋から先ほどの縁の糸のようにみるみるうちに空に溶けていくと、彼女のいた場所に一匹の螢が現れた。それはあつというまにほかの螢たちと混ざり合い、どれがどうだか分からなくなる。

橋姫が消えて。

地藏…「さて、護法童子よ。私はこの螢を導いていく。お前も一緒に来るか？」

童子…「いいえ、地藏菩薩様。ありがたきお言葉ですが、私には為すべきことがございます。どうか私に構わず、皆をお導きくださいませ」

地藏菩薩、柔らかく頷く。地藏菩薩が両手を広げると、その腕に、肩に、背中に、足に、頭に、全身に、辺りを飛び交っていた螢が引き寄せられるようにして隙間なくびっしりと止まる。

暗転。

ざあと木々の葉を揺らす一陣の強い夜風な感じの効果音。

〈6〉

明るくなって、元の場所に童子だけ立っている。

宇治と火車が背後から歩いてくる。宇治が前で火車がそれに寄り添うように。

宇治…「どこか静観した様子で」あの子は救われたのね」

宇治、覚悟ができたような顔をする。

童子、振り返らず。

童子…「柔らかな声で」ええ。皆と一緒に旅立ちました。きっと恋しいお方と会うことが出来るでしょう」

童子、宇治の方を振り向いて。

宇治…「わたくしが悔い改める気もなくて地獄にも堕ちたくないって言ったら、あなたは私のことを斬ってくれる？」

童子、剣の鞘を押さえて。

童子…「いいえ。この剣が斬るものは忌まわしきものだけです。あなたは決して、そんなものではありません」

宇治…「……あの人はどうして私を捨てたのかしら」

童子…「私には分かりませんが、人を裏切れば裏切った方は必ず報いを受けます。あなたをこれほどまでにしたのがその方なら、その方もまた罪は重いでしょう。あなたはその方を忘れることも許すことも出来ないのでしょうか、私は仏ではありませんから、ただ、その方のようにあなたに誰かを裏切らないようにすればそれでいいのではないかと思います」

宇治…「あなたはわたくしを救うといったけど、私を裏切るの？」

童子、首を振りながら宇治に近づく。

童子…「いいえ。私はもはやあなたを救うことはかないませんが」

童子、宇治の顔を覗きこんでとびきり優しく微笑む

童子…「祝言をあげましょう」

宇治、火車、え？つと驚いた顔。

童子…「般若湯も三々九度のための盃もございませんが、二人がいれば十分でしょう」

それから彼は火車を見る。

童子…「火車殿。我々をお連れ願えますか」

宇治…「あ、あなたも、一緒に地獄に行くってこと……？」

童子、頷く。

火車…「正気かい？ はっきり言って、アンタは護法童子の役目をほっぽり出したとは言えないぞ。結果的にアンタはコイツをこの世から滅する任を果たすんだからな。コイツが堕ちるのはただの地獄じゃない。地獄の中の地獄、地獄の最下層、最も罪深きものたちの堕ちる刑場、無間地獄だ」

童子…「私は宇治殿と約束いたしました。必ず救うと。それが果たせなかった今、私が出来るのは宇治殿の心を救い、共に罪を背負って堕ちること。後悔などありません。どうか止めてくださいますな」

火車…「フン、説得は無駄そうだね」

火車、二人を乗せる

童子、宇治の手を取る。

童子…「私も、共に不滅の業火が覆う地に参ります。八万四千大功の苦しみも、あなたと分かち合います。六道のその先までも、あなたの傍におります」

宇治、ふわりと笑う。

火車、二人を乗せて消える。